

へいせい ねんど
平成19年度

ちいきふくしすいしんじぎょうほうこくしょ
地域福祉推進事業報告書

ぼうさい と く
～防災への取り組み～

ほうじんじりつせいかつ たちかわ
NPO法人自立生活センター・立川

はじめに

障がいのある私たちが地域で暮らしていくためには、介助制度やバリアフリー整備など、日常生活をそのひとらしく過ごしていくためのしくみづくりがとても大事になります。

しかし、それだけでいろいろな障がいのあるひとが、どんな時も、なにがあっても、安心して生活していけるのでしょうか？

ふだんの生活をささぐサポートだけでなく、「いざ」という時だからこそ、障がいのあるひとが必要とする支援や、そのひと自身が考えていかなければならない心がけや準備があるのではないのでしょうか？

そこで、私たち自立生活センター・立川では「いざ」という時、そのなかでも「地震」や「火事」といった災害が起こった時のことを、地域で暮らす障がいのある仲間と一緒に考えていくことにしました。

なぜかというと・・・

1995年の阪神・淡路大震災や、2007年の新潟県中越沖地震などの大きな災害でけがをしたり、亡くなった方の半数以上は高齢者で、障がい者、女性、子ども、外国人などの災害時要援護者と呼ばれるひととは多くの苦難を強いられました。

また、避難生活においても多くの困難があったことがわかっており、不安を抱えながら、自宅や日中活動を行っている作業所などで生活を続けざるをえないひとがたくさんいたということです。

避難所となった学校の体育館や集会所には、車いすを利用しているひとが避難できるようなスペースや、生活するうえで必要不可欠なリフトなどの福祉機器の用意はほとんどなく、視覚や聴覚の障がいのあるひとが、避難生活をおくるうえで重要となる情報がきちんと得られるような体制も整っていませんでした。そして、知的・精神障がいのあるひとは、ふだんとちがう環境のなかで、プライバシーも守られないまま生活することが難しかったのです。

いま、立川に地震がきても、私たちはきっと同じような不安を感じてしまうでしょう。

「その時」のために、なにかできることはないのでしょうか？



そんななか、自立生活センター・立川では市民活動センターたちかわ（立川市社会福祉協議会）の主催する「防災まち歩き」に地域の人びとと関わりを持ちながら参加していきました。そのなかで、

「災害がおこる前に自分にとってなにが必要かを考え準備すること
そしてまわりに伝えていくことが重要だよ」

「ご近所さんとのつながりが、あなたの命を守るなによりも強いネットワークになるよ」

というお話をいただきました。

まち歩きを受け、地域で暮らしている障がいのある仲間とともに、この2つのポイントについて一緒に考えていかなくちゃ！と思い、「防災についてみんなで考えよう！ILプログラム」を開催することになりました。（3ページ参照）

そして…

- ・ 私たちの存在や、ILプログラムで形になった防災に対する提案を地域の人びとや行政に伝えていく場として
- ・ 障がいのあるなしに関わらず、立川のまちで暮らしている多くのひとが防災についての意識を高め、防災への取り組みに積極的に参加できるような働きかけをしていくこと

これらを目的として「防災のホントのところを知るイベント～立川のまちに必要なこと！」を開催しました。（11ページ参照）

この報告書は、防災について取り組みはじめた私たちの、いちばん最初の活動をまとめたものです。

2008年3月

自立生活センター・立川

* ILプログラムとは…

障がい者が地域で自立生活を送っていくうえで必要な心構えや知識を学ぶプログラムです。障がい者と健常者がともに生きる社会をつくるために、まず「障がい者自身が力をつけていく場」であり、リーダーも障がい当事者がつとめます。

地域福祉推進事業 ~防災への取り組み~ 報告書

もくじ

はじめに・・ 1

防災 I Lプログラム「防災についてみんなで考えよう！」の概要と目的(全3回)・・・ 3

第1回防災 I Lプログラム・・ 4

第2回防災 I Lプログラム・・ 5

第3回防災 I Lプログラム・・ 6

防災 I Lプログラム「防災についてみんなで考えよう！」の全体を通しての感想・・・7

参考資料・ ・ 防災 I Lプログラム宿題

参考資料・ ・ 防災 I Lプログラム宿題

参考資料・ ・ 防災 I Lプログラム宿題

参考資料・ ・ 「防災についてみんなで考えよう！」チラシ

「防災ほんとのところを知るイベント」～立川のまちに必要なこと～の報告・・・・・・・・ 8

講演録「地域で取り組む防災まちづくり」立川市市民生活部防災課長 北川 宣氏・・・ 10
立川市市民生活部防災係長 富山孝雄氏

講演録「災害があろうとも地域で生きる」～私の被災体験から～・・・・・・・・・・・・ 21
メインストリーム協会 玉木幸則氏

参考資料・ ・ 「防災ほんとのところを知るイベント」～立川のまちに必要なこと～チラシ

参考資料・ ・ 「防災ほんとのところを知るイベント」～立川のまちに必要なこと～会場案内

参考資料・ ・ 「防災について私たちが考えたコト！」小冊子

防災ILプログラム「防災についてみんなで考えよう！」

【プログラムの実施概要】

実施期間	2007年7月13日(金)～8月10日(金) 3回シリーズ
時間	13:30～16:30
場所	たちかわしちゅうおうこうみんかん しばさきがくしゅうかん 立川市中央公民館(柴崎学習館)

【目的】

災害発生時、被災地では多くの混乱を招き、支援を必要としている障がい当事者に十分な対処は取れず、安心・安全を確保できない。そこで、災害時要援護者を呼ばれる障がい当事者が、どのように地域の中で孤立せず安心・安全を確保していくのが自ら考え、地域に提案していける力をつけることを目的とする。

具体的には、参加者には以下の点について、習得してもらうことを目的とした。

- ・ 自分の地域にある防災資源について知る
- ・ 近所の人に自分の存在を知ってもらう
- ・ 災害に備え、事前に自分でできること、やれることを明確にし、実行する



だい かい
【第1回プログラム(7/13)】

リーダー	： おおいしこうじ 大石幸治	オーガナイザー	： ひろせあさみ 廣瀬麻美
講師	： ふくだのぶあき 福田信章	（東京災害ボランティアネットワーク）	
参加者	： しんたいしやう とうじしや めい 身体障がい当事者10名		
主な内容	： オリエンテーション じ こしやうかい 自己紹介 ぼうさいまちある 防災街歩き こうし ぼうさい 講師より防災について しつぎおとう かんそう 質疑応答・感想 じかい しゆくだい じぶん す ちいき ぼうさい かん しりやう 次回の宿題：自分の住んでいる地域の防災に関する資料を しら 調べよう！		

ぼうさいというテーマに参加者を導いていく部分として、体験的に知ることができる防災街歩きは大変有効なものだった。東京災害ボランティアネットワークの福田さんを講師としてお招きし「道に設置されている消火栓」や「小学校にある防災資材庫」など、普段は気づきにくい街の防災資源やその意味について、街を歩きながら伝えていただいた。大変分かりやすい説明で、今まで知らなかった街の防災の取り組みや設備について知ることができた。また、私たちが今後、防災を考えていくためには何が必要かを話す基盤となった。

この回で行った防災街歩きの経験をもとに、自分の住む街にはどういった防災資源があるか、チェックシートを配布し調べてきてもらうことを次回の宿題として渡した。



待ち歩きの風景

だい かい
【第2回プログラム(7/27)】

リーダー	： おおいしこうじ 大石幸治	オーガナイザー	： ひろせあさみ 廣瀬麻美
参加者	： しんたいしやう とうじしや めい 身体障がい当事者10名		
主な内容	： ぼうさい はっぴやう 防災チェックを発表しよう さいがひ かんしやう 災害のビデオ鑑賞 しやう たいへん 障がいゆえに大変なことは じぶん じゆんび 自分でできる準備について ちいき きんじよ ひと 地域や近所の人たちとどのようなコミュニケーションを とっていますか？ じかい しゆくだい す 次回の宿題：住んでいる街の中で、近所とのふれあいをみつ けよう！		

ぜんかい しゆくだい である「じぶん す 住んでいる地域の防災に関する資料を調べよう！」は、さんかしゃ 参加者全員が取り組んできてくれた。ちいき 地域での街歩きをしている最中、こうみんかん 公民館で防災マップを手に入れることができた人や、ぐうぜん 偶然にもしょうぼうだん 消防団の人たちに会い、ちいき 地域での防災の取り組みを伺うことができた人など、じぶん す 自分の住む街の防災資源を知るだけでなく、ちいき 地域の人との関係づくりのきっかけを得た人もいた。

さいがひ 災害のビデオ(実際の阪神・淡路大震災を写したもの)を見た参加者は、つよ いんしやう のこ 強い印象が残ったようで、そこからおお く 多くを感 ことや かんが 考えを語ってくれた。その後に行 った「もし災害が起きたときに、しやう 障がいゆえにたいへん 大変なことは何だろうか」「災害が起きたときに向けて、じぶん 自分ができる準備についてかんが 考えよう」「ちいき きんじよ 地域や近所の人たちとどのようなコミュニケーションをとっていますか？」の3つのテーマの話し合いでは、きようつう 共通して、「ちいき きんじよ 地域や近所の人たちとのつながりが大切だ」というキーワードの意見があお 多かった。ほかにも、じぶん が生活の中で必要とするものを準備するといった、「みづか 自らの力」でぼうさい 防災を考えていく声も寄せられ、さんかしゃ 参加者にとってたが いしき たが 互いに意識を高めあうような時間となった。

さらにこの日話し合った、ちいき 地域の人たちとのつながりを結んでいくために、くたいてき 具体的に自分の住む地域でどんなこうりゆう つく 交流を作っていけるかをけんとう 検討し、行えたことをじかい はっぴやう 次回発表してもらった形で宿題を渡した。

だい かい
【第3回プログラム(8/10)】

リーダー	： おおいしこうじ 大石幸治	オーガナイザー	： ひろせあさみ 廣瀬麻美
参加者	： しんたいしやう どうじしゃ めい 身体障がい当事者9名		
内容	： ちいき はっぴやう 地域でのコミュニケーションを发表しよう みんなできやうゆう (シェア) しよう ふあん しんぱい みんなで共有(シェア)しよう 不安、心配なこと そしてそれらをなくしていくためには何が必要だろう ぼうさいたいさく ひつやう 防災対策に必要なものをまとめてみよう ぼうさいようぐ せいど こうざ かんそう 防災用具と制度について 講座の感想 ぼうさい つう わたし ちいき つた 防災を通じて私たちのことを地域へ伝えていくために		

ぜんかい しゅくだい す 前回の宿題「住んでいる街の中で、近所とのふれあいを見つめよう！」について発表してもらった。きんじよのひとと知り合うきっかけを作れた人、こうりゆう ふか 交流を深められた人、今回はできなかつたがこれから、かわりを持っていこうと意思を表す人など様々だった。なかでも、ちいきの祭りにさんか、そこでのあいきつ おな ちいき す じぶん そんざい し 地域の祭りに参加し、そこでの挨拶から同じ地域に住む自分の存在を知ってもらい、さらに「困っているときに力になってもらいたい」といった話のできた参加者もいた。

みんなできやうゆう しように關しては、ぜんかい話し合つたことをふかめながら、ふあんやしんぱいなこと、そしてそれらをなくしていくためには何が必要かを明確にしていける時間として設定した。かつぱつ 活発なやりとりができ、たいへんゆういぎ じかん となった。ひとりが気持ちを話すことで、そこからグループにきやうかん ひろ 共感が広がり、それらをみんなできやうゆう しようすることであの かいけつさく で 自ずと解決策も出やすくなった。

いざというときに自分たちには何が必要になるかということについて、まとめて書き落としてもらったが、いっぱんでき ぼうさいたいさく だけではなく、しょう 障がいがある上で必要になるもの(車いすの代車、車いすでも使えるトイレ、近所の人の協力など)も数多く出され、地域の多くの市民に伝えたいことがまとまった。

最後に感想をひとりひとりに述べてもらったが、このぼうさい IL プログラムを通して、個人差があるとしても“防災についての意識が変わった”ということはいえる。

また、このあとおこな ぼうさい イベント」に、今回のプログラムからまとめたポスター展示、しょうさつし はいふ おも いちにちめ まちある ようす うつ 小冊子の配布、プログラム(主に一日目の街歩きの様子)を写したビデオの上映という参加をていあん 提案したところ、すうめい かた さくせい きやうりよく 数名の方が作成などに協力していただけることとなった。

【全体を通しての感想】

防災をテーマにリーダーやオーガナイザーが自ら知ろうと努めた部分、そして多くの方からのアドバイスや協力があって実現することができた。

東京災害ボランティアネットワークの福田氏を講師に招き、語られた「もしものことがあったとき、近所の人は何人助けに来てくれますか？」の問いかけは、地域の人との交流を見つめなおすきっかけとなった。

そこから回を重ねて、いろいろなテーマで仲間と話をしていく中で、防災のことを人任せにするのではなく、自分の問題として捉え、何が必要かを考えながら地域の人たちと一緒に防災のことを見つめていく…力をつけつつ、意識も変わっていった。

また、企画当初から、当センターの障害当事者職員で幾度となく、このプログラムの目的や対象者について話し合った。はじめての企画ということで、まず今回は自分たちに身近な、重度肢体不自由があり地域生活を行っている方を対象に限り、目的を三点に絞った。それぞれの参加者が習得するため、障害当事者職員がプログラムとは別に個別に必要なサポートを行い、プログラムと個別支援の両面から行うことができた。その効果として、参加者のほぼ全員が毎回出席し、自ら防災のことを考えていこうとする姿勢となったと考える。

今回は3回シリーズで行ったが、防災というテーマは内容が深く大切なことだけに、今後も継続して防災のことを考えていく必要性を感じた。このプログラムで力をつけたメンバーとともに、立川市各町内で行われている市民参画の防災モデル地区事業や、社会福祉協議会による町内での防災街歩き、また自治会の防災対策の検討など、各地域で行われている防災の取り組みの参加につなげていければと思う。



ぼうさい しゅくだい
防災ILプログラム宿題

(しめい
氏名：)

じぶん す ちいき ぼうさい かん しげん しら
自分の住んでいる地域の防災に関する資源を調べよう！

○あなたのお住まいは？

たちかわし ちょう
立川市 _____ 町

○避難場所はどこ？入り口まで歩いてどのくらい？

ひなんばしょ ある
避難場所は _____ とほ ぶん
徒歩 分

○防災倉庫・防災資材庫はどこ？

ない ある(どこ?) _____)

○最寄の消防署・消防団はありますか？

ない ある(どこ?) _____)

○消火器は？

ない ある(いくつ?) _____)

○消火栓・消火水槽は？

ない ある(いくつ?) _____)

○地域のだれでもトイレは？

ない ある(どこ?) _____)

○公衆電話は？

ない ある(どこ?) _____)

○病院・クリニック・薬局は？

ない ある(どこ?) _____)

○コンビニエンスストアは？

ない ある(どこ?) _____)

○危険なブロック塀・看板・アーケードは？

ない ある(どこ?) _____)

○他に役に立つもの・危険と思うもの、調べたことがあったら自由にお書きください。

たと まち じてんしゃや くるま なお おお かんばん たお あぶ
例えば：街の自転車屋さんが車いすを直してくれる、大きな看板が倒れそうで危ないなど

ちいき ぼうさい じぶん おも
地域の防災について自分の思いをまとめよう！

さいがい ふあん しんぱい
災害について不安なこと、心配なことは？

まる
をつけてください

- うち へや
家、部屋
- いどう
移動
- ひなんじょ ひなんばしよ
避難所、避難場所
- の た
飲みもの、食べもの
- ひとの てだす
ひとの手助け
- ふくしやうぐ
福祉用具 ()
- トイレ
- お風呂
- れんらく
連絡
- すいどう
ガス、水道
- ね ばしよ
寝る場所
- かぞく ともだち
家族、友達のこと
- ペット (いぬ ねこ きんぎよ
犬、猫、金魚)
- その他 (ほか)

さいがい じぶん ひつよう
災害のとき自分が必要とするものは？

まる
をつけてください

- くるま
車いす
- だれでもトイレ
- エアマット
- リフター
- そうぐ つえ
装具、杖
- こきゅうき きゅういんき
呼吸機、吸引機
- おむつ
- お薬
- でんどうくるま じゅうでんき
電動車いすの充電器
- の た
飲みもの、食べもの
- き
着るもの
- ね
寝るためのマット
- けいたいでんわ
携帯電話
- きちやうひん
貴重品
- その他 (ほか)

じぶん す ちいき きんじよ はな
自分の住んでいる地域や近所でお話しやあいさつはしていますか？

まる
どちらかに をつけてください

- ごきんじよとのひととあいさつやお話しは... している していない
- 「している」ひとは、ごきんじよのひとと... あいさつはする お話もする
- 「していない」ひとは、ごきんじよのひとと... 知り合いたい 知り合いたくない

さいがい まえ じぶん おも じゅう か
災害の前に自分ができると思うことがありましたら自由にお書きください。

たと
例えば：予備の車いすを用意する、非常食の準備など

つか
お疲れさまでした！

ぼうさい しゅくだい
防災 I L プログラム 宿題

(しめい :)

す まち なか きんじょ み
住んでいる街の中で、近所とのふれあいを見つめよう！

じっさい おお さいがい きんじょ たす ちから
実際に多くの災害でご近所の助けが力になったといえます。

どんなところでお知り合いを作れると思いますか？

まる をつけてください (はいくつでもいいです)

きんじょ かた きんじょ かた せけんばなし みちか
・近所の方にごあいさつ ・近所の方と世間話(ニュースや身近なできごと)

・おすそわけなど、昔ながらのつきあい

きんじょ みせ しょうてん や お や せいにくてん やつきよく てんいん し あ
・近所のお店や商店(八百屋・精肉店・薬局など)の店員とお知り合いになる

ちいき あつ はな あ きんか
・地域での集まりや話し合い、イベントに参加する

みんせい いん きんじょ かた じぶん し
・民生委員をはじめ近所の方に自分のことをよく知ってもらう

・その他()

きんじょ し あ ふ わたし し
ご近所の知り合いを増やし、私たちのことを知ってもらえるよう、やってみましょう！

どんなことをやってみますか？ (3つ かんが 考えてください！)

(どこ :) で、(だれ :) と、

(どんなこと :) をしてみます。

(どこ :) で、(だれ :) と、

(どんなこと :) をしてみます。

(どこ :) で、(だれ :) と、

(どんなこと :) をしてみます。

じっさい おし
実際にやってみたことを教えてください！

(どこ :) で、(だれ :) と、

(どんなこと :) をしてみました！

(どこ :) で、(だれ :) と、

(どんなこと :) をしてみました！

(どこ :) で、(だれ :) と、

(どんなこと :) をしてみました！

きんじょ ひと みせ ひと はなし かん
ご近所の人やお店の人にあいさつ・お話ししたときに感じたことは？

まる をつけてください

て 照れた・はずかしかった

かん いやな感じになった

うれしかった

たが し あ お互い知り合えてよかった

かんそう 感想をどうぞ

つか お疲れさまでした！



だいぶ暑くなってきた今日この頃、みなさんお元気ですか？

さて、自立生活センター・立川では

災害がおこった時の私たちの生活について考える

“防災ILプログラム”を開催します。

災害は、いつ、どこでおこるかわかりません。

障がいのあるひとが抱える、災害のあったときの不安、

トイレは？避難所は？車いすでも大丈夫？など

いざというときのことを、みんなでお話できたらと思います。

私たちが必要とすることを見つけ、地域に伝えていきましょう！

多くの方のご参加をお待ちしています。



日程：2007年7月13日(金)・7月27日(金)・8月10日(金)

いずれも 13:30～16:30 (全3回シリーズ)

場所：中央公民館

対象者：身体障がい当事者

リーダー：コージー(大石幸治) オーガナイザー：あさみん(廣瀬麻美)

申し込み先：自立生活センター・立川

電話(042-526-1418)または

ファックス(042-523-5545) 廣瀬までご連絡ください。

ぼうさい 防災についてみんなで考えよう! 1Lプログラム

プログラム内容

にっぺい 日程	ないよう 内容
がつ 7 にち 13 きん 7月13日(金)	ぼうさい 基礎知識を身につけよう! こうし よりお 話・街の防災資源をチェック! いま ぼうさい たいさく ほかに 足りないものって???
がつ 7 にち 27 きん 7月27日(金)	しゃしん などを見ながら 災害の問題について 考えよう! しょう 障がいがあるうえでも 災害にあったら... ふあん なこと、しんぱい なこと、そこで生活していくために
がつ 8 とう か 10 きん 8月10日(金)	もしもの時のために、地域で準備できることを私た ちで 考えよう!(秋頃、防災について 私たちの思い を地域の人たちへ伝えるイベントを企画しています)

★ 講師紹介 ★



とうきょうさいがい
東京災害ボランティアネットワーク

ふくだ のぶあき
福田 信章さん

プロフィール:

とうきょうさいがい じむきょく
東京災害ボランティアネットワーク事務局に

しょぞく ねんはんしんだいしんさい お
所属。1995年阪神大震災が起きたとき、

ボランティアとして被災地の支援に入ったのが
活動の原点。その後、被災者の生活を追って

インタビューするなどの活動から、2004年の
新潟県中越地震のときには被災地の支援活動に

あたる。近年に至っては防災講座の講師として、
全国でさまざまな活動を行っている。

～ 防災のほんとのところを知るイベント～ 立川のまちに必要なこと！の報告

私たちは、防災ILプログラムを行ってきた経緯から、もっと多くの立川市民に防災・減災について、どのように取り組んで行くべきかを知ってもらうきっかけとして、2007年10月7日（日）立川市総合福祉センターにて以下の内容で防災イベントを行ないました。

ポスターセッション

防災ILプログラムのなかでの意見を小冊子（別添）にまとめたものを来場者に配布しながら、ポスターセッションを行いました。

ポスターには、ILプログラムの活動内容や災害があった時、不安に感じること、実際に用意したものと近所の人との関わり深めるために行ったことを紹介。柴崎町のまち歩きの際のビデオ映像を流しながら、来場者の方に説明を行ないました。多くの方が私たちの訴えに耳を傾けてくださり、地域に住んでいる誰もが災害にあう可能性があり、その人なりの備えが必要であるということに気づいて頂けたのではないのでしょうか。



起震車・消火器体験

起震車で、阪神・淡路大震災や中越地震などの揺れを体感して頂きました。擬似体験で揺れを経験しているのとは、実際の対応にも差がでてくるのではないのでしょうか。

消火器体験でも消火器の扱いだけでなく、初期消火の大切さを学ぶことができました。

知的や視覚の障がいのある方からは、自分の障がいに応じて、まずどのような動きをするべきかを考える機会になったとの感想を頂きました。



アルファ^{まい}米

災害時に、非常食として行政などでも備蓄してあるアルファ^{まい}米を試食しました。

お湯はもちろん水でもご飯が炊けて食べられるというものです。ドライフードで白米のほか五目、梅しそ味などバラエティも豊富になってきています。参加者も非常食はあまりおいしくないという印象を持っていた人も多かったようですが、おいしいと好評でした。みなさんも家庭に備えてみてはいかがでしょうか？



ほのぼの^{あかり}



家庭にある簡単な材料で子どもから大人まであかりを作れるものです。材料はアルミホイル・ジャムなどの空き瓶・サラダ油・ティッシュです。

参加者の中には、「私もいままで生きてきたけど、こんなの知らなかった。帰って早速、孫たちに教えたい」と言って下さいました。子どもたちも楽しみながら簡単に作れるので、災害時でもしっかり役に立てることと思います。作り方は<http://www.sbk.or.jp/idea/making/lamp.html>をご覧ください。

「地域で取り組む防災まちづくり」

立川市市民生活部防災課長 北川 宣 氏
立川市市民生活部防災係長 富山 孝雄 氏

改めまして、みなさんおはようございます。立川市の防災課長をしております、北川と申します。よろしくお願いたします。本日はお休みのところ、この講演会にご参加いただきましてありがとうございます。また自立生活センター・立川さんがこのような防災のイベントを開催し、このような講演会の機会を頂きましたこと、まず前もって感謝致します。ありがとうございます。

はじめに20分くらいビデオを見て頂き、その後30分くらい立川市が今どのような防災についての取り組みをやっているのか、またどのように考えているのか、というようなことを中心にみなさんにお話し致します。その後10分程度質問の時間をとりたいと思いますので、何か疑問点等ございましたら、質問して頂けたらと思っています。12時までの限られた時間ですが、ぜひみなさんにとって参加してよかったなと思えるようにこちらががんばりますので、どうぞよろしく願いたします。

それではまずはじめにビデオです。「阪神・淡路大震災に学ぶ地震の備えは大丈夫ですか」というタイトルのビデオです。12年前になりますが、阪神・淡路大震災マグニチュード7の大変大きな地震がありました。その模様を見て頂いて、その地震の怖さ改めて感じていただければと思います。それでは早速ビデオを見ていただきたいと思います。

～ビデオ開始～

阪神・淡路大震災、私たちの想像をはるかに超える自然の大きな力は、大地を揺るがし多くの被害を出しました。死者およそ5,500人、ケガをした人36,000人に上ります。全壊・半壊の建物が18万棟を超える大きな被害をだした阪神・淡路大震災。市民生活だけではなく、多くの産業にも打撃を与えました。地震に伴う火災によっておよそ7500棟の家屋が焼失し、大勢の人が被害に遭いました。神戸市をはじめ被災地には1000箇所以上の避難所が設けられ、地震直後30万人を超える人々が避難所生活を余儀なくされました。電気・ガス・水道の被害が深刻で市民生活に大きな影響を及ぼしました。電気は1週間、水道は約1ヶ月半、ガスの支給には3ヶ月程度必要でした。電話などの通信網や新幹線、高速道路などの交通関連の施設にも大きな被害が出ました。

比較的地震が少ないと言われていた関西地方でも活断層は数多く発見されています。地震の間隔が長いとはいえ注意が必要です。

～ビデオ終了～

どこでも地震が起きるわけです。ひとつ問題なのは地震というのは、ふつふつと起きるわけです。それからその後数年、数十年、しばらく静かな時期が続いているわけです。その

ことをすっかり忘れてしまうのです。そこへもってきてドンと地震が起きはじめるというそのために、地震がきてもどうにもならない。そういうことを繰り返してきているのです。関西、南関東、東北のほうも残念ながら各地で日本は活動期に入っている兆しが見えますので、やはり地域に対心した防災に力を入れていかなければならないのです。

～ビデオ～

私たちは地震に対して日頃からどのような対策をしておけばいいのでしょうか？ 阪神・淡路大震災の教訓に基づいて考えていきましょう。

阪神・淡路大震災では4つの問題点が指摘されました。

被災者A:「冷蔵庫は全部ひっくり返りましたしね～タンスも全部ひっくり返りましたしね～大型テレビも上から落ちてきましたね、ほんとびっくりしましたよ。従業員を見送ってそれからおこたに座った途端に、私も座る位置があと15cmくらい横になっていたら、タンスが倒れていたし、それは後でわかったんですがね。暗いときはわからなくて。それから自分の部屋の布団の上にもタンスが倒れてたんですよ。だからもし、遅くて寝ていたらその下敷きになってたんじゃないかという感じの状況でしたね」

被災者Aの家族:「みんな落ちるもん全て落ちていたという、食器も割れて、冷蔵庫も倒れて、真っ暗けで何もわからない状態。まっその後でも一般の住宅でも無理してスペースをとろうということで、柱の数を減らしてやったんが被害を受けているみたいですからね。うちの場合は、たまたま工場ですから、柱も結構太いのを入れていまして、そういう面ではまだ助かったんです。」

阪神・淡路大震災では、たくさんの建物が倒壊し、多くの犠牲者が出ました。犠牲者のおよそ9割が建物の倒壊によるものです。自分の家の耐震性を知っておきましょう。昭和56年以降の建物については、耐震基準が強化され安全と言われていています。簡単な検査なら自分でもおこなえますが、専門家に任せると安心です。地元の建築士事務所協会よりご相談されるとよいでしょう。ブロック壁や建物の外壁など危険箇所の点検から忘れないで下さい。阪神・淡路大震災では、タンスなどの家具の下敷きで死傷者が大勢出ました。このように倒れやすいものは、金具などを使ってしっかりと止めておきます。しっかりと止められている家具などは震度7の実験でも倒れませんでした。重量のあるピアノや冷蔵庫なども大変危険です。しっかりと止めておきましょう。ガラスが割れて大怪我をすることもあります。ガラスに張るシールを活用すると安心です。阪神・淡路大震災の場合、寝ているときに倒れてきた家具が落ちてきたもので怪我をしたケースも多くありました。寝室にはなるべく物を置かないようにしましょう。

被災者B:「ちょうど朝6時ごろですからみなさんあまりストーブもつけていないし、炊事をしていらっしゃるらないので、あれでだいぶ助かったと思いますけどね。あれが白昼だったらやはりみなさんそれぞれ暖房も使っているし、炊事場もなさっているでしょうからね～。そうすると火事も多かったですんじゃないでしょうか」

被災者C:「もう家のこと先に思いましたよ。だからよかったね、あとから気が付いてねそれで上に上がってきたらもうそりやもうでんぐり返して、高速は壊れているし、隣の家もわかれへんね、ガラスもいっぱい降って、でびっくりしてからもう危ないから外に出ようと思っていたら、『危ないから出たらいかん』と言うからね、後から気がついて、よう火事にならんでよかったねと、火を早く消したね。とみんなで言うたんですよ」「水もなかったからね、この度はただお風呂の水が貯めてあったのと、洗濯機の中に水が貯めてあったのでずいぶん助かりました。」

被災者C:「火災には非常に弱かった、もう消防のほうが無条件だったのでやはりあんまり密集しているところに家屋を建てたらだめだなということが今回の教訓です。」

阪神・淡路大震災では犠牲者のおよそ1割の方が火災で亡くなりました。消火器は取りやすい位置に置いて、普段から取り扱い方を見ておき、点検を忘れないでください。お風呂の水は昼間でも貯めておく習慣にしておくと、いざというとき消火の水としても使えます。火が出たらまず小さいうちに消しましょう。地震では同時に多くの火災が発生し、消防車の到着が遅れる場合がありますので、隣近所の人たちと協力して消火に努めてください。阪神・淡路大震災においては、およそ300件の火災が発生しました。地震の被害を最小限に食い止められるかどうかは火を消せるかにかかっています。火災などで避難しなければならぬ場合もできます。決められた避難場所の実際に歩いて行き、確認しておけば安心です。

被災者D:「たべもんとかも全然買えなかったから、しばらく。並びに行っても品物が入ってこようから。たべもんどうしようかなって感じ。」

被災者E:「自衛隊の給水車がきてね。水を補給してくれましたからね。それで助かりましたけどね。それでもやはりそこから家へ持ち込むのにね。かなりのバケツとかもいりますしね。それとこの頃はトイレも全部水洗になってますしね。トイレもみんな止まってるみたいでしたね」

被災者E:「やはりお水ですね。うちのところはどうもなかったんですが、やはりお水が一番と思いますよね。あとはなんとかありますよね。」

被災者F:「うちは比較的にこちらのお家まで水をもらいにきまして、お米をだしてもらい、お風呂よばれて帰ってきました。行って帰ってくると6時間半くらいかかりました。」

被災者G：「今回の地震で救援物資がきはじめてのが3日自くらいやから、少なくとも3日分の人数分の食料と水、それから寝場所もほとんどないし、毛布なんかももちろん届かないからシュラフみたいな寝具も必要だし、地震直後は停電もしていたから、やはり灯りも必要になってくるから、ランタンみたいなもの必要やと思いますね。」

被災者H：「あんな避難用具はね、家のなか置いていても奥へどうしてもしまうでしょ。いざというとき、どこにもあらへんとならんようにわかりやすく、とりやすい場所におかなあかん」

電気、水道、ガスなど全てのライフラインが停止した場合のことを想定し、用意しておくことが必要です。阪神・淡路大震災の経験から私たちが用意すべきものとしてまず最低3日間はもつ食料と水が必要です。その他、懐中電灯、ラジオなども忘れないでください。寝ているときは非常バッグを手元に届くところに置いてください。阪神・淡路大震災の教訓として保管用非常バッグを準備し、玄関や車においておくといざというときに取り出しやすいかも知れません。カセットコンロも用意しておくでガスの復旧が遅れたときに重宝します。

被災者I：「あの～ぼくら被災して一番感じたことは、やっぱり緊急時にみんなが助け合えてたということなんで、ほんとにみなさんに助けていただいたという面がありますので、そういうところは大切だと思います。」

阪神・淡路大震災では、多くの方が長期間避難生活を強いられました。避難所では、共同生活の心構えが必要です。普段から町内会で、話し合っておきましょう。地震の被害を最小限に抑えるためにも日頃から家族で地震に対する準備について話し合っておきましょう。

被災者J：「地震があった時に慌ててしまうんですね。日頃からやはり地震が来た時にどうするかと頭に描いて、地域の訓練とか、それから自分だったらどうするかということを考えて、地震がきたときにはある程度反射的に身を守らなくちゃいけない。もし地震のときに頭や手にケガを負ったりしても、治療や逃げようといってもそこから逃げられないですね。まずグラっときたら自分の身を守る、それから周りの人の身の安全を確保するということがすね。そのためにはやはり突然に家を飛び出したり、危ない行動はとらないということですね。それからもうひとつはやはり地震になりますとデマが飛びますよね。余震が長めに続くとそうするとみんなデマを信じてしまうのでそうではなくて防災無線などちゃんとした情報を聞いて、それにしがたって行動をとるということが大切ですね。それから水・食料の確保ということが大事ですが、鉄則は自分の身は自分で守るといいう心かげがな

いとなかなか大変だろうと思います。」

地震が起きたら、まずテーブルや大きな机の下に入り身を守ります。地震がおさまったら、すぐに火の元の確認です。まず、ガスの栓を閉めます。避難するときは、ガスの元栓、電気のブレーカーをおとします。阪神・淡路大震災では、電気が復旧してからショートして火災になるケースがたくさんみられました。次に家族の安全を確認します。近所で一人暮らしのお年寄りがいらっしゃる場合、声をかけて避難の手助けをしましょう。隣近所で協力し合い近くの状況を把握します。火災が発生していれば初期消火につとめ、隣近所と助け合って物事に対処してください。地震の時、火を消す3つのチャンスがあります。第一のチャンスは揺れが小さいうちに火を消します。第二のチャンスは揺れがおさまってから消します。第三のチャンスは火が小さいうちに消します。一軒の火災が元で、町全体に広まることもあります。常に正しい情報をつかむことが大切です。ラジオなどで地震の状況を聞き、警察や消防の指示に従ってください。デマなどに惑わされないようにしてください。避難するとき車は絶対に使用しないで下さい。また車の運転中に地震が発生した場合は慌てずに車を道路の左端に止め、車にキーをつけたまま徒歩で避難してください。阪神・淡路大震災の時には、緊急車両が大渋滞に巻き込まれ、現場になかなか到着できずに応急活動が思うようにできませんでした。海岸近くに家があるときは、地震により津波がくる可能性があります。海岸近くで強い揺れを感じたり、津波警報が出されたときには、すぐに高台など安全な場所に避難しましょう。

国や地方自治体の地震に関する準備はどのようになっているのでしょうか。国土省では各庁と連携して、災害時における対策を綿密に進めています。そして都道府県や市町村においても地域の実情を考慮した地域防災計画を策定し、災害に備えています。市町村などでは地域防災計画に基づき飲料水、食料、生活物資について必要な準備がなされています。防火水槽などの消防水についてもその整備を図り、雨水の確保、利用の推進などの対応を進められています。地域に合った避難施設の整備、そして防災訓練などを通して、地震に対する地域と社会の自覚をより高めていくことが大切です。

日頃から災害への備えが何よりも大切です。家族はもちろん地域の人たちとも協力し、話し合い、しっかりとした対策を心がけ地震に負けない家庭と社会をつくりましょう。

～ビデオ終了～

みなさん以上見ていただきまして、どうもありがとうございます。それではお手元に資料をお配りして、パワーポイントで説明をさせていただきます。まず、みなさん阪神・淡路大震災でもわかりますように、今年の7月には新潟県の中越沖地震もありました。地震というのはいつ襲ってくるのかわからないという点があります。今日、いま、くるかもしれないという怖い面があるのです。だからこそ日頃の備えが大切になってくるわけです。私たちが住んでいる立川市を中心に考えていきたいと思っています。

まず、立川には立川断層があります。すでにみなさんもご承知のかたも多いかと思いますが、阪神・淡路大震災の地震の原因は活断層(野島断層)によるものです。それと同じ活断層が立川にも通っています。ただ、これについては、1万年とか5千年単位で起きるであろうと言われていて、一応いまの予測では当面は大丈夫だろうということです。ただこれもわかりません。関東ではみなさんご承知の通り、関東大震災がマグニチュード 7.9 というかなり大きな地震がありました。関東大震災が起きてから、だいたい 85年程度落ち着いていますが、関東大震災級の地震はだいたい 200~300年間隔でおきるだろうと言われていていますので、当面関東ではこのマグニチュード 8 クラスの地震は心配ないだろうと言われていています。ただ、マグニチュード 7 クラスの地震、この間の新潟中越沖地震ではマグニチュード 6.8 だったのですが、ああいった地震が近々今後30年間にくる可能性が 70%とされています。かなりの高い確率でくることが予想されています。この 70%というのはいさぐい確率の数字になっております。統計学的にいきますと交通事故で 30年間に人間が死ぬ確率が 0.2%とされていますので、70%というのはいかに高いかというのがわかるかと思えます。

もし、その直下型の地震が立川を襲った場合、どの程度の被害がでるかということが予測されています。仮に多摩直下型地震マグニチュード 7.3 の場合、夕方 6 時、風速 6m で、全壊 697棟、半壊 4229棟、負傷者 1428名、死者も 23名とされています。実際は、いろんなことが複合されますと、もっと大きな被害になる可能性が十分にあります。それから、ライフラインですが、停電率が 13.7%、通信不通が 9.5%の被害予測で、復旧するまでが 1週間~2週間程度かかるとされています。ガスについては立川については停止しないだろうと予測はされております。このように実際に地震が起きたときには大きな被害が予測されております。そこで立川市にどのような防災対策があるかをご説明いたします。

立川市の防災対策についてです。まず第一に総合的な防災体制の確立ということで、防災対策、防災モデル地区、人材育成、防災訓練、自主防災組織、情報収集提供体制、備蓄品などこういった取り組みをやっております。具体的にお話しをさせていただきます。まず、地域防災計画を策定しております。この地域防災計画というのは、もし災害があったときに市がおこなう、基本的な指針というか考えかたで、大変重要な計画です。この計画を 9月に見直しをしまして、新たに地域防災計画が策定されました。11月10日号の広報でみなさまに概要をお知らせするつもりですので、内容をぜひご覧下さい。

この計画の全体像ですが、防災・減災計画、応急計画、復旧・復興計画の 3つに分かれております。1番重点をおいていますのが、防災・減災計画です。いままでは地震が起きた後の対策を中心にしておりました。しかし、地震を防ぐことはできませんが、地震がきたときに被害を最小限にとどめることはできるだろうといういことで、その取り組みを重点的にやっけていこうというのが、この計画の大きな特徴です。そこで具体的に、いま地域に入って取り組んでいることがございます。防災モデル地区推進事業といいまして、今年、柏町、富士見町、羽衣町の 3地区を指定して、取り組みを行っているところです。大きく分けて 2点あります。テーマ 1としては「災害時における避難誘導と災害時要援護者への

支援体制づくり」ということで、現在地域で考えています。その関係でまち歩きをやっているところですが、点検マップなどまちの危険なところはどこだろうとか、ここには消火器があるだとか、このブロック塀は危ないだとか、そういうことを点検するまち歩きを行いました。次にテーマ2ですが、これは「避難所における運営組織づくり」です。避難所というのが、今度の地域防災計画ですと、1次として、小中学校にまず避難してくださいと指定してあります。各地区30校ございますが、いざ災害が起きたらそちらのほうに避難していただくことが、基本的な流れになっております。避難するときのいろいろな注意事項、あるいは避難所で、あらかじめ運営組織を作っておきますと、より対処が十分できると、阪神・淡路大震災でも証明されましたから、それをあらかじめ各地区で作っておく必要があるだろうということで、現在モデル地区で取り組みをしております。この大きな2点が取り組みの大きな柱です。モデル地区については、今年、3地区指定しておりますが、今後、順次3地区ずつやりまして、4年間で立川市内全地区取り組みをしていく予定です。このような地域づくりをいろんな団体を網羅しながら作っていくかと思っております。

それから人材育成ということも取り組んでいます。いま公的機関として、消防署、消防団、警察署、市役所などいろんな職員がいます。ただ実際に地震があったときにどれほど職員が所定の職場に参集できるのかが、大変問題です。この間、たまたま阪神・淡路大震災のときに芦屋市で建設部長であった方の講演がございました。私もお聞きしたのですが、その方の話によりますと、芦屋市役所は市の職員1,100人いたのですが、当日参集した職員が42%という状況だったそうです。この数字が多いか、少ないかは判断しかねますが、立川市でも果たして地震が起きたときに、現在1,300人くらいいますが、何人参集できるかというのはなかなか疑問です。ですので市の職員は、あまりあてにならないと一方では言えます。したがって、みなさん市民のかたひとり一人が自覚をもって、地域で地震に対する知識を普段から身につけておくことが重要になるかと思えます。そういった意味でいま人材育成のひとつとして、地域の人たちや自主防災組織などの方たちに救命救急などの防災に対する知識を学んでいただくということで、防災リーダーを育てていくとか、地域の人たちにいろんな知識を提供するといったことに取り組んでおります。

それから防災訓練をやっておりまして、立川市では総合防災訓練を10月21日に新生小・柏小・6小で予定しております。普段からの備えということで、実践的な訓練を考えておりますので、今日ご参加のみなさんも都合がつかましたら、ご参加いただければと思います。

それと自主防災組織ですが、ビデオの中でも話がありましたけれども阪神・淡路のときは救出者が35,000人いたのですが、約8割の方が家族や近隣者により救助されました。いかに行政だけでは手が回らないかということですので、地域の人たちが協力し合ってやっていく必要があります。その要として自主防災組織があります。現在立川市の自主防災組織は79組織ございます。自治会を母体とし、現在自治会が176組織あるうちの79組織ですので、約45%というのが実情です。これを今度の地域防災計画では70%、120組織程度に

災害が起きた場合、約30,000人が立川駅の周辺に滞留するだろうと言われています。この方たちは、ケガはしないとありますが、何かのデマなどでパニックに陥ることが予想されます。その場合には、出口などに殺到してケガなどをすることが十分に予想されます。この帰宅困難者への対応も重要だということで、私たちは駅周辺の企業がお互いに連携して、協議会みたいなものを立ち上げるといったことなどで避難誘導に協力してもらおうと取り組んでいます。

次に被害を最小限にとどめるための機能強化です。災害時に火災が発生したときに常備消防として、東京消防庁への委託や非常時の消防として、消防団が立川市では10分団あり、184名います。その方たちも地域消防の要として活躍しています。

それと災害に強いまちづくりですが、先ほどにも話がありましたように、耐震化ということで家がまず倒れないことが重要な要素です。みなさんが住んでおられる建築物に耐震があるのかどうかということをぜひチェックをしていただいて、必要があれば耐震改修などをやっていただければと思います。立川市のほうでもこの耐震改修に対する補助制度なども立ち上げていきたいと思っております。

それからあと、ビデオのなかでもありましたが、家具の転倒防止やブロック塀の転倒防止など、まず自分の家を気をつけていただきたいと思います。それから地域には現在1,600軒の地域配備消火器というのがありまして、よく民家の塀の消火器がついているのを見たことがあるかと思いますが、そういったものの整備をしています。また防火貯水槽、消火栓などがあり、消火栓についてはいま2,000箇所市内にあります。よく道路を歩いていると赤い表示で消火栓というのがあるかと思いますが、その近くには道路の下に消火栓があります。それから災害時の安全と生活の確保、復興に備えた取り組みということで、いざ災害があった場合に火事があったときは見舞金等お支払いしています。地震などの広域な場合ですと、なかなか復興については別な問題があります。ちなみに昨年は、火災が101件ありまして、全焼した方も3軒ある状況です。以上ちょっと急ぎ足でお話させていただきましたが、立川市も防災対策に対していろいろ取り組みをしておりますが、基本的な考え方は、自助・共助・公助ということで立川市の地域防災計画を策定しまして、そのなかでいろんな計画的な取り組みを行っていきますが、それとともにみなさまがたにも自らの命、財産を自ら守っていただくことがまず基本にあります。また地域で協力し、支えあっていく仕組みをぜひ進めていただきたいということが大切なことになると思います。そして、自助・共助・公助がうまく連携してはじめて、広域的な災害に対処できるということになりますので、ぜひこのような防災のイベントにも参加し、いろんな知識を身につけていただくことは大変有意義だと思います。こういったことを普段から努力し、いざ災害が起きて慌てないように取り組みをしていただけたらと思います。

最後ですが、自助「地震に対する10の備え」として消防庁が示しております。家具の転倒・落下防止など10の備えがありますので、こういったことも参考にして普段の備えにさせていただきたいと思っております。以上私からの話は終わりにさせていただきます。

しつぎおこた
質疑心答

Q1: 車椅子生活者ですが、災害時要援護者対応については考えていくということですが、期間、スケジュールなどはどうなっているのですか？

答え：災害時要援護者については、先ほどもお話ししたように、防災モデル地区を指定していて、各地域で実情にあった取り組みを考えていただく取り組みは始めているところです。これが一応4年間でやる予定にしております。あわせて行政の方でも災害時要援護者に対し、どんな状況でどこにいてという行政が把握している要援護者の情報と、地域でも把握しておく仕組みが必要だということで、その辺のところも今後やっていきたいと思えます。4年間で全地域の事業が終わるのでそのときまでに形にしていこうと思えます。

Q2: モデル地区というのは、？

答え：柏町・富士見町・羽衣町です。

Q3: 障害者は障害福祉課のほうで人数や場所などを把握しているかと思いますが、高齢者の人は、それを立川市の防災課で把握しているのでしょうか？結局それがないと私たち不安だなと思って。

答え：いま、高齢者のかたの人数的なものは把握していますが、細かいデータについては、現在福祉担当の方と情報共有しておりませんので、今後早急に対処していきたいと思っております。

一応具体的にどう考えているのかといいますと、個人情報との関係でかなりデリケートな形になっています。とくに障がいであることを知られたくないとかいう方がたくさんいらっしゃいますので、まずひとつの把握の仕方ですと、町内内部でも個人情報の関係で同じ町内でも結構問題があったりしております。それをまず整理するのと、対外的には手上げ方式で、いざ災害があったときに救出をしていただくというふうにする場合とこちらから説得する形をあわせて、避難情報のカルテみたいなものを作成していきたいと思っております。手上げ方式の場合本人も同意しておりますから、それを地域の自治会長や民生委員をはじめ関係機関のリーダーの方に情報を提供し、いざ災害が遭ったときには避難支援プランをつくって、それをもとに救助に行くという形にもっていききたいと思っております。現在ガイドラインを作って、それに基づいて具体的に地域のなかでやっていきます。

Q4: 小中学校に一時避難所を作ってくださいっていますが、私たち障害者が使える、トイレや車椅子で使えるものがあるのか、スロープがないところもあります、そういった

情報じょうほうはどのように集約しゅうやくしているでしょうか？

答こたえ：いまトイレは各学校かくがっこうに7基きあります。車椅子くるまいすトイレは3基きあります。全部ぜんぶで210基きあるのですが、いざ避難ひなんの方がきたら47,000人にんくらいの方が予想よそうされていますので、それだけでトイレが足りないという状況じょうきょうになりますので、あと協定きょうていなどを結んでレンタル業者ぎやうしやなどからトイレを借りたりなどをしながら、対応たいおうしていきたいと思おもっておりますが、一応いちおう車椅子くるまいす対応たいおうのものについては、各校かくがっこう3基きですから30基きあります。

それとスロープにつきましては、学校がっこうによってスロープそなを備そなえているところもありますし、整理せいりしていきたいと思おもいます。

Q5：市営住宅しえいじゅうたくで車椅子くるまいすで一人暮らしひとりくをしています。近くちかに学校がっこうはあって、立川市たちかわしの地域ちいきの障害者しょうがいしやの人ひとと話しはなし、取り組みとりくみをしているのですが、いざ、火事かじになった場合は、時間じかんによってはヘルパーさんがいるのですが、いざ自分じぶんが逃げるといいうとき、障害しょうがいが重おもいのでなかなか難むずかしいのです。私わたしも車椅子くるまいすトイレ、障害者しょうがいしやトイレなどマップまップを作りながら回まわっているのですが、いざ火事かじになってしまったら、私わたしは車椅子くるまいすから降りたら、寝たきりねたきりの状態じょうたいになってしまいます。普段ふだんはヘルパーと1対1いちたいいちでやっていて、近所きんじよの人ひとたちに声こゑをかけて協き力りよくしてもらえるように言いっているのですが、お互たがいに近所きんじよづきあいをしていても、いざといいうとき本ほん当とうに助けたすけに来てくれるのか不安ふあんを感じかんじています。

答こたえ：車椅子くるまいすで生活せいかつしている方かたは不安ふあんだと思おもいます、そのような支援体制しえんたいせいを早急そうきゅうに確立かくりつできるようにしたいと思おもいます。行政ぎやうせいだけでは対応たいおうできませんので、地域ちいきの人ひとたちと協き力りよくしあってはじめて可能かのうだと思おもいます。地域ちいきの自主防災組織じしゅぼうさいそしきや自治会じちかいやいろいろな団体だんたいの人ひとたちとお互たがいに助け合たすあう仕組あみを作つくっていかなければ対応たいおうできませんので、今後こんごみなさんと一いっ緒しょに取り組あんでいきたいと思おもいます。

災害があろうとも地域で生きる～私の被災体験から～
メインストリーム協会 玉木 幸則 氏

改めまして、玉木です。こんにちは、よろしくお願ひします。阪神・淡路大震災があつてもう12年が経つのですね。でもあつという間に経っているのですが、災害時の状況は実はあまり変わっていないというのが、僕の率直な感想です。震災後、講演が増えまして震災関連でこの10年間で60本～70本くらいしました。北は北海道の美深町という稚内まであと120kmのところまで雪が深く、2月に行った時はマイナス30度、ホテルに着いた瞬間ゆっくり休んでくださいと言われて、一人ぼっちで寂しい思いをしました。外にも出られず、脳性麻痺の特徴で冬でも汗をかいてますから、へたに外に出て歩いていると汗をかき、氷ができるのです。そんなところにも行きました。南は熊本までかな？全国いろんなところに地震のお陰で行かせてもらえました。でも12年前と話していることはほとんど変わってないです。そのへんは悲しいところですが、とりあえず前半はぼくがどういう経験をしたかということをお話させてもらって、後半が災害時の対策というよりはもう少し大きな部分で話を展開できたらと思つています。

僕ね日本語がむちゃくちゃ下手でね、申し訳ないですけど、今日自分でレジュメを見ても「あっ！あほやなあ」と思つるのは、「災害時があろうとも地域で生きる」とありますね、「時」を消してください。「災害があろうとも地域で生きる」というテーマで今日はお話をさせてもらいます。

今日は視覚障害の人もお越しなのですが、今日自分でもパワーポイントで恐縮なのですが、極力ぼくの下手な日本語で状況を伝えていきたいと思つています。よろしくお願ひします。

まず、簡単に自己紹介しておきますと、結構ええ年です、今年39才で来年40歳で、来年から介護保険料を払うのでドキドキしています。もう少ししたら、うちの家族が来るのですけれども、実はうちの奥さんは武蔵村山の出身でして、高校は立川高校で、僕がここで仕事があるということで昨日から里帰りをしております、僕は今日きたのですけれども、一人で来て、来る前に大事なことがあるのでしゃべっておかないと思つております。僕の子どもはやかましいので、やかましかつたら「うるさい」と怒つてください。

僕の所属している団体はメインストリーム協会といつて、日本のなかでもちょっと変わった自立生活センターでも、「一風、二風？三風？」変わった集団でして、よきもわるきも「一丸」という言葉を大事にしていて、この「一丸」という言葉で結束できたのは、やはりこの大震災があつたから結束できたのかなと思つています。自立生活センターですから、当然どんなに障害が重たかろうとどういふ状況にあつても、地域で生きていくのは当たり前やないかと、地域で生きていくその支援といふか応援といふか、一緒にやつていこうや、そういう仕事をメインストリームはやつています。

僕がメインストリームに関わり始めたのは、もう15年くらい前です。15年あつという間に経つて、僕もこの震災があるまでは、仕事をあまりしていませんでした。いまは考えられ

ないけど、当時は週に一度水曜日だけは、事務所を開けるので僕一人で朝10時に鍵をあげて、水曜日はお客さんも玉木ひとりでやっているのを知っていて、そういう日は一人でご飯食べて昼寝をしながら電話番をするけれど電話もかからないので、また鍵閉めて帰るとい時代もあったのです。そういう時代のなかでこの震災があったのです。ちょっと僕も震災のことを忘れかけているのですが、こういう仕事を頂くたびに、ふり返ることができて、ある意味いい経験させてもらっています、ということをしやべりながら感じているわけです。

このパワーポイントは実は去年作ったのです。それまでは口だけでばーっとしゃべって感覚だけ聞いてもらって帰って頂いていました。実は去年江東区で、このような震災の話をする機会がありました。江東区というのは神戸の長田区と同じような環境だそうです。下町で、しかも埋立地も多いから地震が起きれば、液状化現象もあって、密集しているところも多いから火災が発生すると、燃えてしまう環境だそうです。そこで去年ある小学校を中心として、いわゆるサバイバルキャンプといって11月のまだ寒いときに、商店街のおっちゃん、おばちゃんと学校の先生や親子で参加し、学校に1泊しようという企画でした。学校に避難所を作ろうということから始めて、ダンボールでエリア分けをし、子どもたちは食事や連絡当番などをしたり、また地域の障害を持たれた方も来てますから、その人たちとは介助などをしてもらおうという企画でした。

僕も幸か不幸か呼ばれて、何の因果が僕もなんにもないのに、体育館で毛布一枚渡されまして、「あんたも泊まっていきな」と言われ、一晩小学校の体育館で避難体験をしました。そのときに作ったのがこのパワーポイントでまさか地震当時は、こんなに同じ災害が増えるとは思っていませんでした。避難所の写真とか一切撮ってないのです。この記録はあくまでも個人的な視点で個人的な財産を写していますので、そこら辺はご了承いただきたいです。

1995年1月17日忘れもしません、成人式が1月15日の日曜日で、16日は振り替え休日だったのです。当時僕は結婚してまして、奥さんは、神奈川県相模原市から兵庫県西宮市に来てちょうど10ヶ月目くらいに地震がきました。当時は幸か不幸か奥さんは特別養護老人ホームに勤めてまして、その日は夜勤やったんです。それで僕は一人で寝とったんです。いまでもそうですけど、わりと僕はテレビっ子で、夜3時くらいまで映画を見とったんです。3時くらいにテレビ消して、電気消して、ぐーっと寝入ってちょうど眠りの深いそのときにドーンと身体に何かがのっかってきたのです。もうわけわからんと、なんやろと思って、起きようとしても身体が動かないのです。そして、自分がおかれている状況を理解するのに5分くらいかかりました。なぜ寝てたかという、みなさんはあの瞬間のことをテレビなどでコンビニの中がごっつい揺れている状況を見てましたでしょ、でも僕はあの揺れとかは知らないのです。それは「うそやろ」「どっかおかしいんちゃうか」とか言われるんやけども、知らへんのです。それにごっついポロアポートなので、最初の一瞬でドーンと崩れたみたい

です。僕の住んでいたアパートはポロアポートで家賃が4万円の2Kです。6畳と4畳半と台所

が3畳くらいでした。いかにぼろいかというと、トイレは水洗便所は水洗便所なのですが、鎖がついています。知らない人が多いんやろなあ～、上にタンクがあり、紐を引っ張ると水が流れるという、ごっつい古典的な水洗便所だったので。西宮も一応高級住宅地はあるのですが、僕が住んでいたところは高級住宅地のちょっとはずれで、家賃4万円の関西でいうところの文化住宅です。文化住宅というと聞こえがいいですが、ポロアパートで、どんなポロアパートかという土壁ってわかりますか？僕は震災後5年くらいなんか土壁の匂いが気のせいですが、身体に染みついている感覚があったのです。

僕が寝ていた1階は影も形もありません。もうぐちゃぐちゃでした。僕の車はワンボックスカーで、家が真下に崩れたわけではなく、東から西へ倒れたので、幸か不幸か僕の車にアパートがのってきやがったのです。これで家がなくなったのは、引っ込みがつくのですが、車もなくなったら、行き場に困るわけです。8ヶ月で1万キロも乗っていませんでした。当時、それまでは中古車に乗っていて、清水の舞台から飛び降りる気持ちで新車を買っちゃったのです。そこでみんなが言うのです。「それはなあ新車なんて嬉しそうに買うから地震が起きたんやろ」って、この地震を僕のせいにされて、ひどい話です。このことは保険がきかないですから。

あとでいろいろわかってきたのですが、そもそも関西の方では地震が少ないと言われていて、気候もよく、地震もなく「いいところやな」と言うてたんです。しかし、保険会社は地震が多発することを知っていたのです。それから行政も知事クラス、トップクラスの人には地震が起きそうだと知っていることは知っていたそうなのです。だから保険会社は地震特約という形で、地震保険を勧めてよかったはずなのに、だまっていたそうです。だからこのときにほとんどの人は損害保険で保障されませんでした。これは裏情報というよりみんな知っていることですが、農協さんの共済だけは地震も対応していたのです。僕は農協さんの回しものではないけれど、農協さんの保険に入っていたら、地震が起きたときに火災保険、自動車保険も全てがかかることができたということはこの地震の後に知りました。このアパートの端の人は僕の車がクッションになって、あまり崩れず、埋まることなくすぐに家の中から出てこられました。こんな状況です。悲しいです。今見てもこの状況が一番辛いです。この車はお疲れ様でしたということで、8ヶ月の命でした。

さて、アパート中を見るとここが2階なのです。僕はこの布団が見えているところに埋まっていたのです。ここは(地上部分)2階の壁で、2階の梁が僕の寝ている横に落ちていたのです。状況からいくと、ぼくはお陰さまで上を向いて寝るのが苦手で、横を向いて寝ていたのです。横を向いていたから気道の確保が勝手にできていたのです。これで上を向いて寝ていたら、きれいに天井が落ちていきますから、かなり窒息死しているかなという状況でした。2階の梁も、僕の頭の横20cmのところに落ちていたのです。まさしく紙一重でした。

そして、1階の床が全部抜け落ちてしまいました。僕は幸いベッドに寝ていて助かりましたが、たまたまベッドのクッションが20cmくらいあり、僕の体を吸収してくれたので、圧死することはなかったのです。不幸にも隣に住んでいた大学生は、畳に布団を引いて寝

ていて、亡くなってしまいました。本当に紙一重といいますが、例えばうちの奥さんが夜勤じゃなくて一緒に寝ていたとしたら、多分どっかにはずれているから、どちらかは死んでいたかもしれないという経験です。

また話は戻りますが、なんで建物がつぶれたかをすぐには理解できませんでした。笑い話みたいなことですが、「なんでこないなったんか」と考えていくと、その1年ぐらい前にうちの押入れの床が腐って落ちたのです。大家さんがすぐに来てくれて、床を剥いでみたら、柱が半分腐っていたのです。大家さんが機械油を持ってきて、柱に塗り始めたのです。そして僕に「玉木さん、油をぬったから、腐るスピードが落ちるで」と言ったのです。それでそのままふたをしてしまったのです。それが頭によぎって、「あ～うちのアパートもとうとう寿命だったんかな」と感じました。

その次に思ったのは、アパートがつぶれているということは、ガス漏れしているなど、これで火が出ると熱いなということを考えていました。僕の2階の人もパニックになって「どうしよう、どうしよう」と2階の人の声が聞こえ、僕は僕で「助けてください」と叫んでいたら、2階の人も自分のことで精一杯だから、僕の声なんか聞こえていないのです。「ちょっと待てよ、このままほっとかかれたら、僕どうすんねん」と結局は30分くらい叫び続けて、なんていうのか、遭難した人の気持ちがちよっとわかった気がしました。

あの声を出し続けると、言語障害で力が抜けてくるから、声が出なくなるのです。でもそこでがんばって「助けてください」とまた必死に言っていたら、近所の人々が助けに来てくれて「よっしゃ～いま助けてあげるから、まっとけや」と言って助けてもらいました。

この助け方も大変でした。何がよかったかといううちのアパートの近所の家はつぶれず、周りの人は元気だったのです。だから近所の人々がたくさん集まって助けに来てくれて、まず「まっとけや」と言って、引きずり出されるまで30～40分かかりました。途中聞こえてくるのはのぎりの「ギーコ、ギーコ」という音で、光が見えてきたときには、ちょうど梁が邪魔をしていて、「いまからちょっとテコの原理でぬくけど、棒があたったらごめんな」と言われながら、柱をどかして助け出されました。

また冬ですから、布団が邪魔になって、布団をはさみで切ってもらってようやく出してもらいました。出してもらったときに「ここ2階やで」と、みんな口そろえて「寒かったやろ」と言われたのですが、毛布と冬の布団をかぶって、さらに2階がのっていて、声も出しているから、めちゃくちゃ暑かったです。考えたら、薄いパジャマだったけれど、汗だけで、「風邪ひくんかな」と思うくらいビショビショでした。それでも外は寒いので近所の人々が毛布を用意してくれて、ワゴン車の中に「ここに寝とき」ということで、寝ていました。

そうすると、「今回の地震大きかったですね」とか、「阪神高速が倒れていますよ」とかいふラジオの音が聞こえてきました。そこで初めて僕は家がつぶれたのは、この地震のせいかと理解できました。地震が起きてから、地震があったということを知覚するのに、じつに2時間もかかっていました。しかし、このことは僕だけではなくて、割と多かったです。寝入っていて、いきなりドーンときてますから、そのドーンでみんなつぶれてしまったので、

何が起きたかわからない状態でした。私の大家さんは家をつぶすとき、みんなに声をかけてくれて、「ユンボ」ってわかります？パワーショベルです、あれで崩しました。でも大家さんの計らいで、一気につぶさず、アルバムやら服や本などそういうものは出すことができました。結婚するときに、タンスも買って、電子レンジも買って、全部パーでした。全部8ヶ月の命でした。「あ～あ～」という感じですが・・・

たぶん東京の江東区あたりでは、このような状況になるのかなという感じです。今年も江東区でサバイバルキャンプみたいなものがあるので、今年も行くつもりです。

次の写真は、メインストリーム協会の職場ですが見た目はわかりませんが、じつは建物が平行四辺形になってしまっています。そして事務所のなかは、壁が全部落ち、扉は壊れてしまい、お風呂マットを扉の代わりにしていました。事務所がつぶれて、「これからどうしようか」、「自立センターをやめるわけにもいかんしな〜」、「とりあえず何かしようか」、根拠もなくなるとかなるわという集団ですから。この時も結構大変でしたが、アホなことばかり言って、「そういえばドーム型のテントがあったから、あれを事務所にするか!」とか、「テントに FAX とかひけるんか?」とか、まじめにこういう会話をしている、「いけるんちゃうか」とか、根拠のない返事をしたりしてました。

でも当時は NPO 法人もなく、勝手な任意団体だったので、「行政も金だしてくれへんしな〜どうするよ〜」と悩んでいたら、お陰さまでちょうど家なくなったメンバーが2人いて、僕ともう一人頸椎損傷の人が家をなくしました。ちょうどその時、名古屋の AJU 自立の家の方が休息を兼ねて、街頭募金でもやりに来るかという話をいただいて、「お前らな、家ないんやろ、家なんか名古屋行って住んでこい!名古屋なんか風呂入れるぞ!」と言われ、「行きます!」と言ったのです。でもただ行くだけではなくて、「なんか募金活動してくれるらしいわ、お前らな 500 万円貯まるまで帰ってこんでええわ」と、「え〜!! 500 万ですか」とか言いながら、1 月 30 日に名古屋に行きました。

それから 2 週間、夕方になったら駅前に行って募金活動をしました。土日は 100 人規模の募金活動をして、名古屋駅前と一番の繁華街、栄というところでやりました。そのときはめちゃくちゃお金がはいり、びっくりしますけど、日曜日に一日で 80 万円でした。なんではいったかという、当時、赤十字などいろいろな団体が募金活動をしていました。噂として、「現場で何に使うんかわからへん」ということがありました。それよりもぼくらは露骨に「障害者の自立生活を支えるための自立生活センターの再建のためにお金ください!」と使い方も明らかにしながら募金活動を行いました。そのお陰で結果的に 2 週間で、ここだけの話ですよ、800 万円の募金が集まりました。これがバネになって、再建できました。

そして、名古屋に行ったときには、市営住宅の車椅子対応住宅が 1 軒確保できました。しかも当時、全身性介護派遣事業を名古屋市のサービスで使えて、その派遣事業を AJU 自立の家がやっていたということで、僕らをあたまたにその後にも一人か二人続け、その市営住宅で落ちついて、静養して、また被災地に帰ってくるということができたのです。そういうことがこの災害でありました。これは何かというと、やはり日ごろのネットワークで、われわ

れ障害者団体のネットワークがあったらからこそ成立したのです。避難所に救援物資などが届いても、届いているけどさばききれずになっていたり、それはいまま問題になっていると思います。けれど横のつながりは大きいです。直接メインストリームに水やカップラーメンなどが届いたのです。そういうことで、つないでいたという状況です。

次は僕の新居です。二見公園と書いてありますが、仮設住宅というのはだいたい公園に建ち、たいがい小さいところでも建ちました。僕が入ったところは、桜に囲まれ、けっこういいところでした。最近、新潟などの仮設の状況みていたら、グレードアップしています。2DKとか大きさもいろんなタイプがあって、震災当時は一律に一人でも6人でも2Kでした。その後は障害者対応などもありますが、当時は僕も不便で使える状況ではなかったです。「だれのための仮設や」ということで、やはり健全者のための仮設でした。いろいろ想定した仮設住宅の発想はなかったです。たぶんいろいろ工夫をされていると思いますが、仮設は仮設でそんなに本気でやっているわけではない気がしました。人が外を歩くと足音が聞こえ、外の公衆電話の会話も聞こえます。でもユニットバスがついていて、一番最初に奥さんが喜んだのが、「お湯がでる！」と、さっきのボロアパートは、外に出てガスの元栓を開いて、カチカチと風呂を沸かす、そういう生活でした。

当日はどんなことがあったかという、自宅の目の前に病院があってそこに僕を運ぼうとしてくれました。しかし、病院も被災していますから、「災害の人の受け入れはちょっと待ってください」ということだったのです。僕が受け入れられたのは10時過ぎ、したがって震災発生から4時間経っていました。

病院へ行くと、僕はまだ野戦病院というのを知りませんが、お年寄りの会話を聞いてみると、「まるで野戦病院やわ」ということをボソッと言われてました。どういうことかというときが担架の代わりに運ばれて、僕も障害者の専門家ですから、「あっあの人、頸椎損傷になってはるな」とか「あっあんまり動かささんほうがええな」という状況が続いていました。僕も傷は無かったのですが、首がちょっと痛くて、痛み止めの座薬を入れてもらいました。その座薬はあとで聞くと「これが最後やねん」ということで最後の座薬を使ってもらったのです。

そこにいて、よくよく聞いていくとこういうことでした。今クリニックとかちょっと大きい病院でも、薬局があるところが崩れました。みなさんは薬の在庫が何日あるかご存知ですか？ せいぜい3日分だそうなんです。3日分しか在庫が無いのです。なぜかという、いま流通システムがしっかりしているので、薬がなくなってもFAXで午前中に注文すると、午後一でまた薬が入ってくるので、余分な在庫を病院は経営上、置かないことになっているのです。

ところが大きな地震が起きると、交通が麻痺します。毎回東京に来るたびに、僕が心配してもしょうがないですけど、意外と幹線道路が国道20号線や新青梅街道や青梅街道などは関西に比べると道幅がとても狭いです。でも看板に「災害時にはここは支援のための道路になります」と書いてあります。けれど間違いなく車はみんな走ります。阪神・淡路大震災

のときも一番大きい道路は片側3車線の道路で、そこでも大渋滞でパニックを起こしていました。まして関東で震災規模の地震が起きたら、まず交通という部分が大変になり、それは国もよくわかっていると思います。ただ道幅広げたりすればいいという問題ではなくて、やはりモラルというものが大切だと思っています。

薬の話に戻りますと、3日分しか在庫がないという状況で薬を切らすのか？地震がないとき、僕がいた病院に精神障害の方が自分の薬の紙を持って訪ねてきて、必死になって「この病院にこの薬ありますか？ぼくこれがないとちょっとしんどいんですが」と言われました。その病院にはなかったのですが、たまたまその先生がいい先生だったので、どこどこ病院にはあると言って、看護師さんに連れて行ってもらい、結果的にその方の薬は確保できたようです。

そういうのを含めて薬の問題というのは、われわれ障害者にとって、非常に大事でそれこそ「命」に関わる問題です。ただ、在庫の現状というのは3日分しかないということを見なさん方にも知っておいてもらいたいです。だから何ができるのかというとそれは僕もわからないですが、ただそういう状況になると薬は手に入らないという状況もありますよということです。

そのあと僕は病院に行った後、どうするかというと、看護師さんが今日は薬もいれたし、家に帰ってくださいと言われてしまいました。でも家もつぶれたしなと思いながら、とりあえずつぶれたアパートに戻ってみると大家さんが「中学校が避難所になっているみたい」と聞いたので、そこへ行こうかということで行っただけです。中学校など学校や公民館は行政が指定する広域の避難所になっています。だから災害時は自分の近くの公共施設に行くと、とりあえず何か情報が入ってくるというシステムにはなっています。

僕が住んでいるところというのは、高級住宅地の外れですから、小高い丘に建てていて、僕がいた中学校も丘の斜面に建てていました。その中学校の体育館に行くにはグラウンドから1段30cmくらいの階段を15段くらい上がったところが体育館でした。僕は怪我はなかったですが、埋まっていたせいか力がなくなって、自分で踏ん張ることができず、人に引っ張ってもらいなんとか上がりました。

それで避難所の状況を話しておく、テレビで避難所の状況が映ったとき、コミュニティができたとか助け合いができたとか言っていたんですが、それは震災後1週間、10日、2週間経ってからの状況だったと思います。それでも当日の避難所というのは、家がつぶれた人もつぶれてない人もみんな一緒でした。しかも余震の揺れが怖いから、出口に近いところから場所を確保していきます。しかも座ったところが自分の陣地なのです。僕のように遅れていくと僕がいれるところは奥のほうなのです。しかも足の踏み場もないところをずっと奥へ進んで行って、人にあたりながら、「ごめんなさい」と言いながら奥にたどり着きました。家がつぶれてない人は、次に何をやるかということと家から布団を持ってくるのです。これからすごいですよ。電気ポットを持ってきて、いまだいたいどんな家庭でもカップ麺は常備してありますよね。それでカップ麺を持ってくるのです。僕はパジャマ一枚で寝ていて、当たり

前ですが、とても寒かったです。ちょうど近所の人が毛布を一枚だけくれて、二人でその毛布だけで一晩過ごすことになったのです。家がつぶれていない人は、毛布もフカフカでカップ麺を食べて、その臭いが漂ってくるのです。「いい臭いやな」と言っても、「家があるからしゃあないやな」と思いながら、まっそれはそれでしょうがないなあという状況もありました。

その後、トイレに行きました。いまだと、小中高もだいたい様式便所が1個か2個できてきました。ところが当時はまだそんなものは無く、だいたい和式だったのです。それでも階段を使って着いたところが和式便所でポコーンとてんこもりになっていたのです。何かとはいいませんが。。で僕もがんばって支えられたらできないこともなかったのですが、やけに冷静な自分がいて、ここでコケると汚れるなどと思い、汚れると水は止まっているし、着替えもないし、我慢しようかと、結局僕はそこでは我慢しました。この我慢って怖いんです。普通は僕だけじゃなくて、障害を持っている方やお年よりは、我慢をしているのです。その我慢を言い換えると震災だから我慢をしているわけではなくて、日常的に実は我慢していて、不便なのが当たり前になっているわけです。だから、別に文句を言わなくたって、ところがニュースを見ていると、駅前で代替バスを3時間近く待つ

～テープ切れ～

並んでいるおじさんとかが怒っているわけです。「いつまで待たせんねん」とかごっつい怒っているわけです。でも、震災がなくて、もともと障害を持ったものはバスも乗れないのかと怒ったわけです。駅に行って電車乗せてくれと言っても、人がいないからちょっと待ってとか言って15分、30分、1時間、待つというのは当たり前でしょう。だから所詮ある意味、災害になったときに誰が強いかというと、実は障害をお持ちの方とかお年寄りのほうがある意味精神的に強い人もいます。

一方で障害を持っていない人が、普段はごっつい当たり前でなんの不自由もなく生きていて、ところが災害になるということは、それがいきなりかなりの不自由さを強いられ、文句をぐちぐち言うわけです。わが先わが先という方が非常に目につくわけです。

そして避難所の話に戻りますが、おにぎりはその当日夜中の11時くらいに届いたのです。その届き方は、みんな殺気立っているから、小学校から先に配って、次に中学校に届いて、「みなさん小学校のほうに先に届いているよ」と言って、みんな「えっなんでや」とか言って、「市議員のさんが声をかけたらしいねん」と言われました。「大変な時期なんですよ～」とか言いながら、その時期に議員さんがいわゆる権力ですよ、権力を使ってね、おにぎりを届けたところで、「あんた何考えてんねん、そんな考えるくらいやったら、もっと大事なことを考えなあかんのんちゃうか」ということが実は被災地ではよくあったのです。しかも配り方には条件があって、「子どもから配りましょう、次は自由にどうぞ」と言ってしまい、そうするとぶわーっといくわけですよ、もうそれはハイエナ状態ですよ、

もうお年寄りとかは「今行ってもあたらへんから、今度にしよう」とか言っているわけです。今度よく見たら、さっき家から布団持ってきて、カップ麺食べていた人がおにぎりも食べているのです。これは何でしょうかね。食い物の恨みは恐ろしいですよ～。でもね、 magari なりに日本にほんの国は小学校しょうがっこうの時から、道徳どうとくという時間じかんがあって、みんな助け合たすいをしましよとか、形かたちだけかはどうか知りませんが、学校の先生せんせいいたらごめんなさい、それにもかかわらずです、ここ一番いちばんの時にやっぱり自我じががでるといふかね、ほんまに周りまわりの人に目めがいかないんやなという気がするのです。だから災害さいがいがどうのこうの言う前まえに日常的にちじょうてきにですね、僕ぼくも含めて言いいますけれど、自分じぶんのまわりまわりにどんな人ひとがいて、どんな生活せいかつの仕方しかたがあるのかということことを少しすこでも考かんがえられないものかと、そうではないからこそ災害時さいがいにに自我じがが出でたりするのかなと思おもいました。

一人暮らしひとりくをしている人ひとが何人なんにんがいて、安否確認あんびかくにんが遅おくれたらどうのこうの言いっていますが、行政ぎょうせいが敏速びんそくに安否確認あんびかくにんができるかと言いったら、できません。間違まちがいなく。だって市役所しやくしょも被災ひさいしているし、行政機能ぎょうせいきんのうが止とまります。そういう状じょう況きょうの中なかで、要援護者ようえんごしやにただ安否確認あんびかくにんと言いっても無理むりなので、無理むりだけど、文句もんくいってくる人ひとがいます。ぼくらの支援しえんで言いうとまず自分じぶんがどうなるかを考かんがえ自立支援じりつしえんをたてますから、やはりフットワークは大きおおいです。少なくともうちの利用者りようしやさんについては、その日ひのうちに安否確認あんびかくにんができました。なんでできたかという、うちの利用者りようしやとスタッフスタッフがバイクで回まわり、それで全部ぜんぶ安否確認あんびかくにんしたのです。やはりフットワークが大事だいじですね。

その中なかではっきりしたのは、家いえが半壊はんくわいになった頸椎損傷けいついそんしやうの男性だんせいがいて、常つねに一人ひとりだったので。近所きんじよのおっちゃん、おばちゃんおばちゃんがここに足あしの悪い兄わるちゃんにいがいたということことで居場所いばしよがわかったのです。でも、とりあえず玄関げんかんをあけて「大丈夫だいじやうぶか？」という声こゑかけしかできなかったのです。今まであいさつもなかつた。やはり、普段ふだんから近所きんじよの人ひとぐらいは何人なんにんか集あつまって、車椅子くるまいすに乗のせるくらいは、せめてそれくらいは少すくなくとも自分じぶんから言いえる人ひとを作つくって下さい。自分じぶんで避難ひなんできる仕方しかたをひとつはああるかなと思おもいました。

それからもうひとつは、緊急通報システムきんきゆうつうほうというのがありますが、あれは災害時さいがいにには役に立たたないです。どうのことかと言いうと、あれは電話回線でんわかいせんを使つかっているから、災害時さいがいにになったら、今いまは知りませんが、災害時さいがいはまず公衆電話優先こうしゆうでんわゆうせんに変わるのです。だからかかりにくくなるのです。ボタンを押おすと全部警備会社ぜんぶけいびがいしやにいくのですが、警備会社けいびがいしやからのコールバックコールバックができず、もうそこでアウトです。ここ一番いちばんの大事だいじなときときに使つかえないのです。それはたぶんわかっているはずなのですけれども、まだ改善かいぜんされてない。今後こんご、緊急通報システムきんきゆうつうほうを電話回線でんわかいせんではなくて、無線むせんなどを使つかってできる仕組みしくみを考かんがえていかなあかあんということことがひとつです。それからその後あとに西宮市にしのみやしにできたのですが、災害さいがいに関係かんけいなく例たとえば119番押ばんおすだけで、登録とうろくしておいて、消防署しょうぼうしよの端末たんまつで該当者がいたうしやの家いえに行いけたり、言葉ことばがででない人ひとも対応たいおうできるシステムシステムを作つくったのです。それは災害時さいがいだけでなく、日常生活にちじょうせいかつでも役に立たちますが、これもまた災害時さいがいにには機能きののうするかどうか分わかりません。

まず、立川市たちかわしだったら立川市たちかわしだけでなんとかできできないかとか、僕ぼくの中なかでずっと言いっている

のですけれども、いわゆる災害時の広域連合みたいなものを作ったらしいのです。例えば、半径100km単位で、自治会で協議を行なうなどです。障害をお持ちの方が震災時にその土地にとどまるといのはかなり大変で、逆に他の土地に行けばいい、冷たい言い方をすると、実はその場に居る必要はないのです。なぜかという、結局情報の問題です。例えばとどまっていたい人に聞くと、「そこにおらんかったら仮設住宅に当たらない」とか、「そこにおらんかったら、何か制度がもらわれへん」とか、そんな勝手な思い込みも含めて被災地にとどまっています。ところがとりあえず被災地から出て行ってもらってそこで通常の生活を送ってもらわなかったら、被災地の人材も確保でき、被災地のライフラインが復旧します。介助者も被災していますから支援ができないので。介助者も復旧し、そういう状況が整ったら、自分たちも地元に戻るということにする。僕が思うに半径100kmくらいの自治体で定期的な協議をしておく必要があると思います。いざというときに受け入れをきちんとするという協定などを、いい加減つくらないといけないという思いです。災害時、僕が考えるのはそのくらいです。

災害のときに要援護者をどうするかという話はもういい加減にやめなあかんと思います。乱暴ないい方も知れないけど、阪神・淡路大震災が起きたのは12年前で、その後も名古屋で水害があったり、新潟も2回ほど地震があったり、いろんなところで水害や地震が起きています。そのたびにいわゆる災害時要援護者と言われるひとたちの対応をどうすんねんと同じことを言っています。それでも何も変わっていません。去年じつは内閣府がやっと災害時要援護者の避難支援に関する検討委員会立ち上げたのです。ただですよ、僕もみてないですけど、今年にいたっては、ついこのあいだ、厚生労働省の障害福祉課の専門官が、阪神・淡路大震災の時に障害者の人はどうしていたんだろうか？具体的に知的、多動、自閉の人とかが街が変わったことでかなりのパニックな状況になったから、どういう支援をしていたか聞きたいと言われました。先月ですよ、先月！もう時代錯誤もはなはなだしという感じですよ。

街づくりということを考えると、ソフト面もハード面もやはりきちんとなければいけないと思うのです。例えば、避難所になっている学校はまだ一般のレベルでいくと低いんです。「学校はどんなところですか？」と聞くと、小学生でもだいたい「勉強するところ」と言って終わります。よくよく考えると、勉強するところだけではないのです。

例えば、僕は親で授業参観に行くと、子どもの教室が3階で上がれないのです。また選挙の時には投票所になります。そうすると行けるところもあります。例えば、こんなことは言いたくないのですが、障害をお持ちの方も教師として働きたいという人もいるかもしれません。でも、うちは階段しかないから車椅子の人はどうするの？で終わってしまうのです。

だから今回みたいに避難所にもなりますとか、地域の運動会とかに使えばいいのでないでしょうか？学校こそがほんとに誰でもが使える環境で作らないといけないわけですよ。ところが作らない、なぜかという、いまだにある地域が知的障害者が増えてきて、知的障害者の養護学校が個別支援学級を増やそうとしているのです。一方で普通学校は何かを変えて

いるかという、変えていってないのです。そのあたりに最近インクルージョンという言葉がでできます。

インクルージョンという教育はやはりできあがってないです。東京都はそれがもう露骨にできています。そのあたりを考えると小手先の災害時だけの対策では、災害時に障害者が乗り切れるかという、僕は乗り切れないと思います。結局何が言いたいかという、去年の2006年12月13日国連総会が前回一致で障害者の権利条約を採決したわけです。そこで、今の高村外務大臣が9月28日に向けて国連に行って、日本も批准するように進めていきますと、サインをしたのです。国連のなかで115番目にしてサインをしたのです。しかもこれから何年かかけて国内を整備し、最終的には、障害者の差別禁止条約を批准しようという目標です。でも、2001年の段階で日本の国は国連から勧告を受けているのです。先進諸国の中で差別禁止法を作っていないのは、日本だけだと、いつになったらつくるのと、勧告まで受けているのです。その勧告があったから、今年から特別支援教育というのがはじまりました。特別支援教育かインクルージョン教育かというところとぜんぜん違います。またともに学ぶ、ともに生きるというような教育をちゃんと作っていかなければいけないのです。そのためにはやはり当事者がどんな街にしたいか、どんな暮らしをしたいか、それが災害があってもなくても地域で生きていくことが当たり前で、それをきちんと認めていけるような国であったり、人であったり、街であったりしなければいけないということだと思えます。

僕はいつもこの地震の話をするときに、言うのですが、その場のしぎのことではあかんのです。やはり日常的に何回もいいますけれど、みんなが地域で生きていけることが当たり前で、地域で生きていけないことが問題なんだということをここにきていない人にどうやって伝えていこうか、ここにきてない人っているんな人が生きていけるのだと、いろんな人が地域で暮らしているのだ！ということはどうやって伝えていけるかということが、たぶんこれから一番大事なことだと思えます。それをしていかなないと、震災の時に乗り切れないから、小手先の話をして、結局震災がこなかったら、何にもせんでええのかということなのか、災害がこなかったらよかったよかったですませるのか、と。

だからこれからは日常的な人と人とネットワークづくりというか、近所の人に挨拶ができているかとか、挨拶だけではなくて「今日はいい天気ですね」とか、「最近阪神よわいですね」とか、そういう当たり前のコミュニケーションが大切だと言うことです。人権意識というのは今からちゃんと高めていかないと、ひとり一人の尊厳を守るような仕組みを作っていくとだめなのです。尊厳を守るといことは、その人の存在を認めるということですから、いい加減にやっていると駄目なのです。いまの障害者自立支援法ではだめなのです。そのあたりの概念から取り組んだり、機会均等法でみんな同じにするのかということとは違うのです。例えば、その人にあつた支援を提供してはじめて平等を言えるわけです。だからお金を1割払っているから、あんたも払えという自体がおかしい、それより高齢者の介護保険もそうです。高齢者も地域で生きていけるような仕組みにしなければいけないのです。そのためには乱暴な言い方をすると、介護保険自体が障害者福祉サービスにくっついていかな

ければだめなのです。その人がどういう生き方で、どういう生活をしたいか、それを支えていくというのが大事だということなのです。また最近、個人情報保護法という法律ができたから、なかなか情報が出せない、災害時に個人情報がだせるのかどうか、だせない間に人が死んでいくかもしれません。なんでもかんでも湯水のように情報を出せというわけではなくて、例えば、立川市の場合は立川市に住民登録する段階で私たちの市は緊急時にはこういうところでこういう形で情報は開示しますよと、それがうちの市のやりかたですよ、それを納得していただいた上で、住民になってくださいというくらいの、踏み込んだ形での行政の責任が、僕は絶対いると思っています。個人情報も大事だけど、その前に大事なものは「人の命」です。「人の命」を守るための個人情報の開示がやはり必要なのです。そういうことをやはり今後当事者と一緒に考えていかなければならない、これからはこのことはすごい大事なことではないかと思えます。

質疑応答

Q1：難しい本質のこととかまったく分かりませんが、例えば、いま大きな地震がきて、避難所に決められている小学校に被災の有無の関わらず、みんながいっせいに避難します。その時に健常のご家族と高齢者の二人で支えている方たち、障害者の方たちもみなさん一箇所に集まるようになっていますが、例えば、障害を持っている方たちは、福祉センターに避難して下さい、自分で何とかできる人たちは、なんとか小学校にという案は、おかしいことでしょうか？

玉木氏：そうですね。そこに行く道のりが大変で、いまおっしゃった提案も大事ですけども、でも少なくとも一時避難先として自分が住んでいるところの近くの避難所にとりあえず行って、そこできちんとして対応できるようなコーディネーターがあって、それが福祉センターや先ほど僕が言ったような隣の市の施設だったり、きちんとして障害者に合わせて対応ができる仕組みを育てていくという、そういう形にしておかないといけないと思います。例えばここに来て、範囲が広いわけですから、ここまでどうやってくるのですか、というところでもこけちゃいます。まず少なくとも自分の家の周りで第一時避難先は確保できるというかたちをつくっておくべきだと思います。それから2~3日後に次の生活の目標みたいな生活図がイメージできるような避難先につなげていくという、そういうやり方が一番大事なのではないかと僕は思います。

質問者：そうですね、今日のお話のなかで一番怖かったのは、薬の在庫が3日しかないということをお聞きしまして、50歳過ぎの方はもうほとんど何かの薬を飲んでいるほど、

高齢化社会になっているのですから、例えばオムツとかそういうものもいま避難所にはたぶん均等に配られていると思うのですが、そうするとやはり高齢者の必要な薬とか、オムツだとかが確保されているとか、2番目の避難所の必要性などが今日印象に残りました。

私のようないかいの主婦でボランティアのような人間が行政にどこまで言えるかわかりませんが、こういう提案をしていくのかなと今日感じました。どうもありがとうございました。

玉木氏：均等に物資を置く必要があるのか、第2次的避難場所の確保、その2つをきっちりとおさえておくのが大事だと思います。

Q2：家がつぶれてしまった方は、第1次避難所にいざざるを得ないと思いますが、ガタガタになりつつも、つぶれずに住んでいる障害者のかたやお年寄りの方はわり避難所に行かれなかったというふうに聞いているのですが、そのかわり物資の情報がなかったというのが問題だったと聞いているのですが、そのへんはどういうふうにされていましたか。

玉木氏：避難所に行くか行かないかが問題ではなくて、避難所に行かなかった人の多くは、これは僕の主観ですが、日頃の人間関係が薄い人が相当いたのではないのでしょうか。われわれのような自立生活センターなど他にも障害者団体がいっぱいあり、そういうところに関わっている人たちに関しては、会員さんを対象にきっちり対応できるし、必要な支援物資を送るなどはできています。しかし、どういう組織に属していて、地域の中でもぽつんといるなあという程度の人たちが孤立していたり、それはやはりどうしようもできませんでした。それを考えると、高齢者・障害者世帯でもしょうもないことでもいいです、日常的にあいさつをしたりすることが大事なのです。僕も助けてもらった理由はじつは大家さんが走って飛んできたのです、「ここに足の悪いにいちやんがいるからほってみて」と言ってくれたのです。「あっ、あそこにあの人がいるんやな」ということがきちんと、日頃の関係がそんなに深くなくてもいいから、「ここにあの人おったな」とか、「ここにこんな人いたな」とかがちゃんとわかるようなコミュニケーションとかコミュニティづくりとかがやはり必要ですね。民生委員さんのまわし者ではないですが、例えば民生委員の役割は、その地域の要援護者世帯を把握しておかなければならないという条項があるのです。そういうことであれば本当に民生委員さんを活用するならば、いまの民生委員制度をもっと踏み込んだ形できちんと情報把握してもらって、その人がコーディネーター機能をもつというのも、僕はひとつのやりかただと思います。でも残念ながら、この場に民生委員さんがいたらごめんなさい、多くの方はやはりまだ名誉職というのか、頼まれたから仕方がなくやっているような民生委員さんも少なくありません。そういう人たちも、一定のトレーニングを組んで、コミュニケーションをする核になってもらいたいと思います。その核になる段階で当事者も絡んでいながら一緒につくっていくというやり方が今後は必要ではないかと思っています。



防災のホントのところを知るイベント



たちかわ

ひつよう

立川のまちに必要なこと！

日時：2007年10月7日（日）10：00～15：00

会場：立川市総合福祉センター（富士見町二丁目）

参加費：100円（全額をゆめ風基金を通して、中越沖地震の被災地の障がい者支援に使わせて頂きます。）

地震、火事などの災害はいつ、どこで起こるのかわかりません。

赤ちゃんからお年寄り、健康な人から障がいのある人まで

み～んな、「その時」を迎える可能性があります。

あなたは、そして、あなたの近くに住んでいるあの人は、もしもの時

安全に避難・生活できるでしょうか？

イベントを通じて、みんなで一緒に考えていきましょう！

ご家族・ご近所お誘いあわせのうえ、お気軽にご参加ください。

主催・お問い合わせ：

NPO法人 自立生活センター・立川

立川市柴崎町2-10-16 オオノビル2F

Tel 042-526-1418 Fax 042-523-5545

担当：廣瀬・岸野



協力：立川市市民生活部防災課・立川消防署

後援：立川市社会福祉協議会

11:00 ~ 「地域で取り組む防災まちづくり」

こうし たちかわししみんせいかつぶぼうさいかちょう きたがわ わたるし
講師：立川市市民生活部防災課長 北川 亘氏

さいがい おこったそのときから、わたしたちのまちはどうなってしまったのでしょうか？いつ来るかわからないその日のために、必要となるものは？いま、立川で進めている防災対策についてもお話をいただきます。

13:30 ~ 「私の災害体験から」

こうし きょうかいふくだいひょう たまき ゆきのりし
講師：メインストリーム協会副代表 玉木 幸則氏

しんさい けいけん しょう しゃ とちば さいがいはっせいじ ひさいち せいかつ はなし
震災を経験した障がい者という立場から、災害発生時や被災地での生活についてお話をいただきます。

たまきし 玉木氏プロフィール

1968年兵庫県姫路市出身。脳性まひの障がい当事者。1992年に自立生活センター・メインストリーム協会（兵庫県西宮市）事務局次長に就任後、障がい者の自立生活運動に深く関わる。阪神・淡路大震災の被災者であり、2年間にわたり仮設住宅での生活を送る。

*自立生活センターとは？

障がいのある人が、地域でのなかで楽しく、安心した生活を送れるよう様々な活動を行っている団体です。2007年現在、全国に約120箇所あります。

きしんしゃ じしん たいけん
起震車で地震を体験してみよう！

かんたんな防災グッズ「ほのぼのあかり」をつくろう

ちいき ぼうさい かつどう しょうかい
地域の防災にむけての活動の紹介

しょうがいのある市民が考える、災害対策

ひじょうしょくししょく
非常食試食コーナー（12:00～13:00） ほか



かいさいしゆし 開催趣旨

立川市では、防災計画の策定や、各町で防災モデル地区推進事業を実施するなど、防災をテーマとした地域づくりが進められています。

そのなかでひとつの要点となっているのは、高齢者、障がい者、外国人、乳幼児などの「災害時要援護者」と呼ばれる人たちの災害時の対応のあり方です。しかし、彼らに必要な支援体制が準備できていれば、災害がおきた際も、自立した生活を送ることが可能とされているのです。

今回のイベントでは、自分と同じ地域で暮らしている様々な人が、どのようにしたら安心して避難や生活ができるかどうか考える場にしていきたいと思っています。

かいじょう ちす 会場までの地図

たちかわえき とほ ぶん
JR立川駅より、徒歩20分。

にしたちかわえき とほ ぶん
JR西立川駅より徒歩10分。

たちかわえきたくち ふじみちょう ちやうめ
立川駅北口(10)(11)からバスで「富士見町2丁目」

バス停下車徒歩5分。

じよせいそうごう そうごうふくし
女性総合センターからくるりんバスで「総合福祉

センター前」バス停下車。

くるま らいじょう えんりよくだ
お車でのご来場はご遠慮下さい。



ぼうさい し たちかわ ひつよう
防 災 のホントのところを知るイベント「立 川 のまちに必 要 なこと!」

かいじょう
会場あんない

2F 視聴覚室 『講演会』『ビデオ上映』 活動室1・2 『休憩室』 屋外 『起震車』『消火器体験』『非常食試食』『出展』

